第54号

平成２９年

１０月１日

題 字
植 木　満
初代東進会会長

東進

発行所

土浦一高東進会

茨城県立土浦一高
進修同窓会東京支部

発行人
東進会会長 飯塚　哲哉

事務局　〒102-0093　東京都千代田区平河町２－７－４　砂防会館別館６階
宮崎法律事務所　気付　東進会事務局
TEL（FAX）　０３－５４２１－５３２１
E－mail：toshinkaisecretary@gmail.com
ホームページ　https://to-shin-kai.jimdo.com/

弦楽四重奏団と独奏クラリネット（平成８年卒　森　泰規）

■平成２９年度総会・懇親会
演　奏　　土浦一高吹奏楽部
演　舞　　土浦一高応援指導部
講　演　　竹内　潔
演　奏　　弦楽四重奏団
森　泰規（平成８年卒）

■総会講演
地域とアート
～鳥取から見える文化芸術政策の未来
竹内　潔（平成１１年卒）

■総会・懇親会出席者

■謳粋会について
若山　宏（昭和３６年卒）

■アカンサスクラブ講演録
～東京と地元茨城をつなぐ
「ツナグ茨城」における地域活性化～
助川　達也（平成８年卒）

■リレー放談（第４回）
「たかがゴルフ、されどゴルフ」
小野　幹夫（昭和４６年卒）

平成２９年度　総会・懇親会が盛大に開催されました

６月１１日(日)　　学士会館

土浦一高応援指導部による演舞

土浦一高吹奏学部による演奏

柴沼醤油様からのプレゼント

「土浦一高青春どら焼きおいしいな」

司会の伊丹さん（右）と当番幹事の佐々木さん

いつまでもお元気な片岡先輩と山口先輩(右)

最多出席者数を誇る昭和４１年卒の皆様

平成卒も頑張っています

地域とアート
―鳥取から見える文化芸術政策の未来―

竹内潔（旧姓大林）（平成11年卒）

この度は、このような講演の機会をいただき、誠にありがとうございます。

例年、偉大な先輩方がご講演されている中で、また大勢の大先輩の前で、私のような若輩者が話すのは僭越極まりないのですが、こんなことをしている後輩もいるという話題提供として、聞き流していただければ幸いです。

私は在学時、硬式野球部に所属し、社会人になると同部OB会の亀城クラブのお手伝いをしてきました。しかし、東進会との関わりは昨年からで、私の大学のサークルの先輩でもある今回の総会当番幹事の森さん（平成８年卒）に声をかけられたことがきっかけでした。

高校卒業後は東京大学（文科三類）に進学し、教育学部を出て、茨城県庁に就職しました。その後、人事異動で文化振興の仕事を経験すると、これを深めるために政策研究大学院大学（東京・六本木）で文化政策を学び直し、３年程前に県職員を辞めて同大の研究員となりました。そして、今年４月から鳥取大学に教員の職を得て、家族（妻と２歳の娘）のいる東京と鳥取の２地域居住生活を始めています。

鳥取大学には、工学部教授として、昭和50年卒の横田孝義先生がいらっしゃるということを東進会の会合で教えていただき、すぐにご挨拶に伺いました。新天地に郷里の先輩がいるということで、とても心強く感じています。

さて、今日のテーマである「地域とアート」についてお話しを進めたいと思います。

皆さんは、茨城県北芸術祭（KENPOKU ART 2016）というイベントが、昨年秋に開催されたのをご存知でしょうか。県北地域の６市町（日立市・高萩市・北茨城市・常陸太田市・常陸大宮市・大子町）に32の会場が設けられ、国内外の85組の現代アート作家が制作した１０９作品が展示されました。

体育館いっぱいに敷き詰められた白い砂の上一面に植えられた繊細な金属製の草花、暗闇の中で緑色や紫色に妖しく光る大小のシャンデリアなど、思わず息をのむ、見入ってしまう作品を求めて、来場者はスタンプラリーのように県北地域を回遊し、９月から11月の65日間で延べ約78万人が訪れたといいます。

このイベントの予算規模は約７億円、県は4.7億円を負担しています。皆さんはこれを高いと感じるでしょうか、それとも安いと感じるでしょうか。

近年、アートを地域振興の起爆剤として期待し、自治体が数億円規模の予算を投じるイベントが日本各地に広がり、少なくとも20以上のプロジェクト（それぞれが３年に１度程度の開催）が進行しているといわれています。茨城県北芸術祭も、新潟の「大地の芸術祭」や香川の「瀬戸内国際芸術祭」などで一定の「成果」が上がっているのをみて開催したという経緯があります。

鳥取でも、平成26・27年の２か年にわたり、「鳥取藝住祭」と称して、アーティストが地域に滞在して作品づくりと住民との交流を図るイベントが県内各地で行われました。平成27年は、県内10地域、約40組のアーティストの参加で、県予算が0.7億円。全国で最も人口が少ない県（約57万人）ですから、決して小さくない金額です。

このような取り組みで、どのような「成果」が得られたのでしょうか。

鳥取では、「藝住祭」を継承する形でWEBマガジン「＋○＋＋○」（トット）が誕生しています。このサイト内には、「藝住祭」の成果に関して、次のような記述があります。

「県外・海外から招かれたアーティストが作品制作を通じ、地元住民のネットワークと交ざり合った結果、地域課題に取り組んだり、地域の魅力資源が発掘されたり、暮らしをちょっと豊かにするヒントが生まれたりしました。」

どうでしょうか。あまり目立った「成果」とは言えないかもしれません。しかし、小さな、確かな変化があるとも読めます。

鳥取に赴任してから、これに関わった30～40代の比較的若い世代の方々に話を聞く機会が何度かありました。彼らはまちなかでゲストハウスやカフェを始め、地域の人との交わりを楽しんでいるようでした。そして、彼らの多くが藝住祭をきっかけにしたＵ・Ｉターン移住者なのです。

芸術祭をやったから、若者の移住者が増えている、と単純に結び付けることはできませんが、何らかの関係を見出すことはできそうです。これが私の当面の研究課題です。

最後に、アートを政策として扱うことの難しさにも触れておきたいと思います。

今年４月、北関東の公立美術館で、ある現代彫刻の作品が、政治的中立性に問題があるとして撤去される事件がありました。一方で、「文化芸術振興基本法」が今国会で改正され「文化芸術基本法」となり、前文中で表現の自由の重要性が改めて強調されることになりました。

また、アートを地域の経済的な活性化の「手段」として扱うことは、アートの本来の価値を貶めることになるとの批判もあります。

このような問題にも向き合いながら、地方自治体などが文化政策にどのように取り組むべきなのか、東京と鳥取を往還しながら考えていきたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

来賓

茨城県東京事務所係長
藤井　喜樹様

茨城県東京事務所長
根本　博文様

土浦一高校長
杉田　幸雄様

準会員

S29　西川　恵美子

S27　坪井　洋

S23 中　山藤　和夫

S20 中　山口　進

S20 中　石島徳太郎

S16 中　片岡　弘安

S32　小野　治

S31　武藤　明

S31　渡辺　隆

S31　中村　信秀

S31　大野　金一

S31　色川　嘉一

S31　菊地　清

S38　野村　ルナ

S37　矢口　照雄

S37　北川　正之

S36　若山　宏

S33　沼里　征二

S33　關井　康雄

S32　服部　彧雄

S41　飯塚　哲哉

S41　飯塚　泰助

S41　相澤　興二

S40　廣瀬　巳良

S40　伊藤　勝

S40　池和田　暁

S39　鈴木　達

S41　野口　卓男

S41　長戸　琴

S41　中島　忠男

S41　幸田　三重

S41　高山 了

S41　今泉　房 子

S41　今井　修二

S43　木村　繁夫

S41　山村　章

S41　安井　惠子

S41　宮本　英尚

S41　本多　光行

S41　久松　信明

S41　初田　正雄

S44　永井　博

S43　渡邉　慎一

S43　柳沢　成二

S43 宮崎　好廣

S43　幕内　邦夫

S43　常山　浄子

S43　鈴木　厚

S44　平野　忠男

S44　助川　博夫

S44　逆井　誠

S44　齊藤　泰雄

S44　大関　亨

S44　岡崎　孝宜

S44　池田　博一

S48　君山　利男

S48　神立　哲男

S48　太田　慈徳

S48　井坂　公明

S45　鈴木　良治

S44　丸木　康次

S44　福田　成志

S50　加藤　祐司

S50　内田　敬子

S50　穐山　富美子

S48　吉田　正史

S48　福島　郁夫

S48　豊崎　利明

S48　小坂部　充功

S52　野口　稔

S50　細井　伸一

S50　星川　美代子

S50　樋口　久人

S50　鶴見　美智子

S50　斉藤　昇

S50　川島　敦子

H5　佐藤　一成

H5　伊東　明彦

S56　酒井　学雄

S56　井川　忍

S55　櫻井　成一朗

S55　小野　雅代

S54　長須　美浦子

H7　青木　智典

H7　緒方　浩一

H7　伊丹　牧子

H6　堀越　智也

H6　長井　真之

H6　五十嵐　朝青

H5　山本　貴司

H11　白田　千晴

H11　竹内　潔

H10　佐々木　祐介

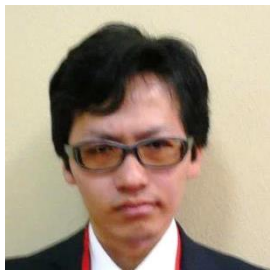
H9　福山　浩平

H9　石嶋　桃子

H9　森下　真生

H8　森　泰規

当日掲載の許可をいただいた皆さまの顔写真です。（順不同、敬称略）


H21　内藤　雅之

H14　横山　茉由子

H11　白田　典史

謳粋会について

若山　宏（昭和36年卒）

私が謳粋会会長職を引き受けたのは、１２６回からで、現在２２７回を終えたばかりだ。初めて参加したのはJR大塚駅南口近くにあった玉淀。東進会の総会が開かれた後の二次会という形であったような気がする。その後、機会があったら参加するという程度で そんなに多くはない。当時の会長は篠田さんで、美味しい日本酒を持ち込んで、そのお酒の説明をし、参加者の写真を撮っていた記憶が残っている。

謳粋会の名前の由来を私は知らない。ホームページには食べ歩き飲み歩き20代から80代までと書いてある。会には会員を締め付ける規則、会費もないが、慣習として会長職が有り、幹事会もある。また東進会の下部組織として位置づけられている。参加の連絡を締め切り日までにすればよいだけだ。ただ無断欠席した場合は実費を支払わなければならない。参加者は大学生から卒寿を迎えた人たちまでその年齢差が大きい。一高卒らしく長幼の序があるのだが、年の差を感じさせるような雰囲気ではないのがこの会の特徴といえる。

私が会長として心がけているのは、美味しい肴とおいしい酒をリーズナブルな金額で提供することだ。しかし最近は徐々にお店の値段が上がってきている。

この会の会員は健啖家が多く結構の量の酒を飲む。自由な飲み方をされると会の参加費が確定できない。そこで飲み放題付きのお店を探し、日本酒を持ち込むことにしている。なぜ飲み放題なのに酒を持ち込むのかというと、普通、飲み放題の日本酒は三倍増の合成酒入りで、本来の日本酒とはかけ離れた物が多い。学生時代にハチハニーワインとか赤玉スイートワインを飲むと、翌日頭ががんがんして、必ず二日酔いという感じであった。

ところが就職した後、フランスワインだと相当な量を飲んでも二日酔い現象が起こらない。不思議だと思い、調べるとフランスワインには混ざり物が入っていない、ということがわかった。当時の日本酒の多くが、糖類とか甘味料とか合成日本酒「アルコール」が入っていた。酒販会社の枡喜が特別企画として、純米吟醸酒を造った、と言うことを酒屋で聞いて買った。それを飲むと美味しく、しかも二日酔いということがない。それから日本酒のことを勉強した。また酒の本を書いた友人に誘われて、吟醸酒を飲む会に参加し、そこで多くの吟醸酒を飲む経験をした。

私はそれ以来、純米酒か純米吟醸等の純米酒しか買わなくなった。ワインは温度の変化で味が変わる、ということをテレビ映画のコロンボを見て知った。流通時の温度管理を含め、貯蔵時の温度管理が難しいということなので、あるがままにと諦めた。

会での持ち込みのお酒は地酒専門店かデパートの酒類販売で買うことにしている。私が会長でいる間はこれを続けるつもりである。

私が会長になってから毎年開催しているお店がある。横手先輩から推薦を受けた千駄木の「鰻の山ぎし」だ。毎年20数名が参加する。今年は28名であった。この鰻は本当にうまい。しかも話し合いで日本酒の持ち込みが認められている。つまみも美味しい。鯉の洗いが特に良い。部屋の定員が最大で25名という制限があるが、このように会員から好評なお店はリピートすることにしている。会のお店を選ぶのは私の専売ではなく、毎週第三木曜日に幹事会を開いて決めている。

鰻の山ぎしにて（平成２９年７月１３日実施）

開催のお店は居酒屋が多いが、中華やビストロ・バル等を選ぶこともある。イスラム料理のお店を選んだことも。詳しくは東進会のホームページに謳粋会の今まで飲んだお店の一覧が掲載されている。

最近の謳粋会はおかげさまで、平成卒の若い人たちが参加するようになった。本当に嬉しいことだ。若い人が参加すると会が活性化する。若い人の参加が東進会も発展すること間違いないと確信している。会は性質上新陳代謝が避けられない。年配者の老いが進むと参加者が少なくするので、若い人が参加しなければ会は衰退に向かう。

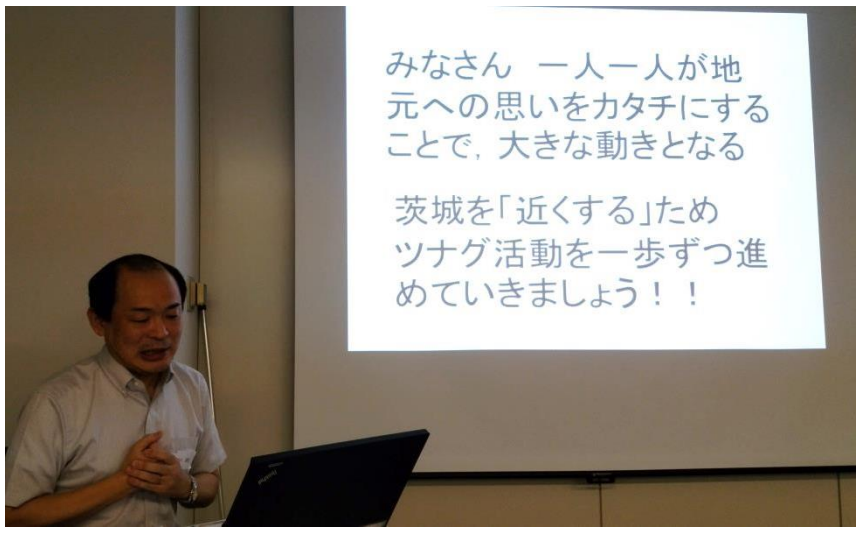
私は２０００年施行の介護保険法の推進をある市民団体の事務局として関わった。その当時は今の認知症という言葉はなく「呆け」と言っていた。平均寿命が延び、体は元気で頭は病気、というのは大変なことが起きると危惧されていた（元気なまだら呆け）。

最近の報道によれば認知症がある努力をすれば進行を止められると言うことがわかった。認知予防体操も各地で実行されてきている。老いは足腰からという言葉がある。筋力運動は年寄りにも効果があり、さらにその後の調査で機械を利用しない運動もその効果は変わらないと言うことがわかった。さらに人との対話が重要で孤立（独居）が認知症発症要因になる可能性大だ。

高齢化社会を迎えるに当たり、その高齢者が尊厳を持ち、生きがいを持つためにどのようにするのかを自分なりに考え、行動する必要があると思う。その一つとして、月に一度美味しい食べ物を食べ、おいしい酒を飲み、言いたいことを言う謳粋会を大いに利用していただきたいと私は思う。

アカンサスクラブ講演録
～東京と地元茨城をつなぐ「ツナグ茨城」における地域活性化～

助川　達也（平成９年卒）



アカンサスクラブで講演される助川氏

りたく、庁内公募で中小企業課へ。若手商業者のネットワークやコンペ事業に取り組み、この時築いた商店街の有志との関係性は財産となった。同時期に中小企業診断士の資格も取得。

○東京での活動「茨城ツアー」

震災後２０１１年４月に東京に出向し文京区に在住。東京首都圏と茨城をつなげる場をつくりたいと考え、まずは知り合いを増やし見聞を広めるため、公務員や診断士の勉強会・交流会に積極的に参加。そこで知り合った人々を茨城へ案内する「茨城ツアー」を定期的に開催した。単に観光地を巡り名物を食すだけではなく、かつて関わった商店街有志から街への思いを聞き、懇親するといった「人に会いに行くツアー」として、延べ１４１名の方が参加してくれた。

○「ツナグ茨城」の誕生

「茨城ツアー」を実施しながら、「若手茨城出身者の会」の立ち上げを企画。参加した勉強会・交流会で知り合った茨城出身者を集めた懇親会を２０１３年12月に実施。15名の参加で始まった会も、茨城ゆかりのお店での懇親会を２・３か月おきに繰り返すことで、参加者が集ってきた。６回目からは，食や農をテーマにした勉強会や、地域活性化をテーマに茨城で活躍する方を東京に招いての勉強会も開催。小さな会を繰り返すことによって、「地元への思いをカタチに」する場所、茨城をつなぐ活動のプラットフォームとしての場づくりを目指すようになる。

○茨城に戻る～活動の停滞

２０１５年４月に東京出向がとかれ、茨城県庁（水戸）に戻る。幹事の多忙等もあり、一時期「ツナグ茨城」の活動が停滞。そんな中、全国の都道府県の出身者が集まる「出身地day」で発表する機会をいただき、若手出身者の集まりである他県の「ネオ県人会」の活動に刺激を受け、改めて「ツナグ茨城」の立ち位置を確認した。四国や九州の「ネオ県人会」は、情報発信や物販イベント等に取り組むなど積極的。茨城を含め関東勢は東京から近いからか、そこまでの熱意はない。では逆に東京から近いことを活かして、茨城と東京との「行き来の総量」を増やす、そのきっかけの場づくりをすべきではないかと感じる。

○出身地day茨城の開催

20～30名の勉強会・交流会が多かった「ツナグ茨城」で、１００名規模の大イベントを企画。全国版の「出身地day」を参考に、茨城を入り口に市町村単位の地元ごとに集まって話をするような場がつくれたら、さらに盛り上がるのではと思い、２０１６年に第１回「出身地day茨城～ツナグ茨城わがまちサミット」を開催。約１００名の参加があり大盛況であった。参加者は皆、故郷のことが気になっている。地元の話がしたい、何か力になれることはないか、といった思いにあふれていた。

○「ツナグ茨城」の課題と展望

参加者や賛同者の活動が促進される「ツナグ活動の揺籃の場」となり、地域ごとの支部や地元ツアーなどの動きがどんどん生まれてほしい。また運営面では、若手への巻き込みや、何かしらを請け負えるような組織体となることにも力を入れていきたい。これからの時代、定住人口や交流人口とともに、「人と人」「地域と地域」がつながり関わりあう「関係人口」がますます大切になってくる。「ツナグ茨城」の活動によって、この「関係人口」を増やし、茨城を盛り立てていく一助になれたらと思っている。

○出身地day茨城２０１７開催（２０１７年９月９日）

「ツナグ茨城」の主催により茨城の若手出身者等１１２名が参加し、出身地day茨城を開催。茨城とどこか・なにかをツナグ事例の発表、出身市町村ごとに集まり語る「市町村カフェ」、様々なツナグ活動による「茨城カフェ」、そして懇親会と、大いに盛り上がった。

○自己紹介

茨城県庁入庁後、ある講演で「日本の人口が減少する」という話を聞き、地域活性化に使命感を持つ。個人的に自主的な勉強会を立ち上げたり、他の自治体職員との交流を重ねた。商店街支援に携わ

次回のアカンサスクラブは
12月7日（木）午後7時から
ザインエレクトロニクス会議室にて
開催いたします。大勢の皆さんの
ご参加をお待ちしております。

編集後記

会報「東進」は年2回発行されています。本日、秋の号第54号をお届けします。今年も残すところ3カ月を切りました。時のたつのが年々早まっていくように感じている今日この頃です。突然の衆議院解散で世間が騒がしくなっています。日本とアメリカ、北朝鮮との関係。この国は一体どこへ行こうとしているのでしょうか？

そんな中で、東進会は土浦一高の同窓会東京支部として、同窓生が楽しく集い、自らを高めることができる会として、いつまでも変わらないことを願っています。多くの同窓生が東進会に集い、今後ますます発展しますように。

リレー放談（第４回）
「たかがゴルフ、されどゴルフ」

小野　幹夫(昭和46年卒)

前号の緒方さんから、「リレー放談」のバトンがいきなり飛んできました。好きなことを自由に書いて良いとのこと、肩肘張らずに大好きなゴルフについて、思いつくままに筆を進めてみます。

ゴルフクラブを初めて握ったのは、確か社会人になって3年目頃、もうかれこれ40年以上も続けていることになります。あの頃の給料では、ゴルフのプレー代を工面するのは結構大変なことで、ゴルフコースに出られるのは精々2か月に1回程度。小学生の頃の遠足の日を待つような気持ちで、本番の日に向けて練習場通いをしていたことを懐かしく思い出します。

50歳を過ぎた頃からはその反動か、時間と財布に少し余裕が出てきたこともあり、ほぼ毎週末ゴルフコースで芝刈りに励んでいます。ここ10年位は、コンスタントに年間50～60ラウンドをこなしており、すっかりゴルフに嵌ってしまった訳ですが、ここまで飽きもせず夢中にさせるゴルフの魅力は何だと思いますか？

まず一つ目は、緑の絨緞のようなフェアウェイや大小の樹木に囲まれた自然豊かな環境の中で、プレーを楽しむことができることが何といっても魅力ですね。ある意味日常的な景色と隔絶された贅沢な環境の中で、汗を流し開放感を味わうことができ、大いに気分転換を図れます。

二つ目は、思いっ切りゴルフクラブを振り抜いて、ボールが芯にあたった時の爽快感ですね。平均的な中高年の体力の小生でも、ドライバーショットが芯に当たればボールは２３０～２４０ヤード先まで飛んでいきます。青い空に吸い込まれるように飛んでいくボールを眺める時のスッキリ感は、なんとも言えないくらい気持ちの良いものです。自分のパワーだけで、２００メートル以上も先にボールを飛ばすことができるのはゴルフだけかなと思います。

そして三つ目は、ゲームとしての面白さです。年齢や性別による体力差、経験や運動能力による技術の差があっても、ハンディキャップやティーショットの位置で適切な差を設けることが認められており、年齢、性別、上手下手に関係なく、対等に競い合うことを楽しむことができるスポーツです。

ゴルフというと、オジさん達限定のスポーツのような印象が強いと思いますが、最近は大分様子が変わってきています。若い人達だけのグループや、女性のゴルファー、ご夫婦や家族で楽しむ方など、かつての接待ゴルフ中心の時代のゴルフ場とは雰囲気も異なり、カジュアルで気軽に楽しめるゴルフコースが増えてきています。

「東進会」のホームページにも、ゴルフ愛好者が中心になって20年以上も続いているゴルフ大会の記事が掲載されていますので、ぜひご覧ください。今年も5月の新緑の時期に、筑波山を間近に仰ぎ見るゴルフコースで、昭和31年卒80歳を筆頭に、昭和50年卒60歳までの老若?男女20名が、日頃鍛えた腕前を競い合い、大いに盛り上がりました。来年も、またこの時期に開催予定ですので、ゴルフの好きな方、若い会員の方の参加を期待しています。

東進会ゴルフ大会

最後に自慢話を少々。実は昨年秋、小生の所属するゴルフ場のクラブ選手権試合で、偶然に偶然が重なり優勝、「クラブ・チャンピオン」を獲得してしまいました。予選を11位で通過し、ここからはマッチプレー、これまでは最高ベスト8止まりでしたが、今回は粘りに粘っているうちに、最後は相手がミスをしたりして逆転勝ち・・・みたいな試合が毎週続いて、とうとう初めての決勝進出。決勝戦は一日で36ホールをマッチプレー方式で戦うハードな長期戦でしたが、一進一退の戦いが続き、34ホール目で追い付き、35ホール目で一つリード、最後の36ホール目は引き分けで、そのまま1アップの逃げ切り。正直言って自分自身が一番信じられない大番狂わせの優勝でした。

チャンピオンに小野さんの名前

あれから約半年がたちますが、燃え尽き症候群なのか、その後の調子は今一つの状態が続いており、余りパッとしません。ラッキーは2年も続かないと思います。今年は初心に戻り、何とか予選で上位16名に残って、決勝トーナメントに出ることを目標に頑張ってみたいと思いますが…？(この会報が出る頃は、既に結果が出ているかも知れません)。

東進会ゴルフ大会でお会いした先輩の中には、ご自分の年齢以下のスコアで18ホールを回るエイジシュートを達成した強者が何人かいらっしゃいます。小生も今年で65歳、次の大きな目標として、10年計画でエイジシュート達成をめざしてみたいと思います。ゴルフを楽しみながら、健康体を維持し、運よく目標達成ができたら最高です。

東進会のゴルフ大会だけでなく、プライベートなゴルフでも喜んでお付き合いいたしますので、ぜひお誘いください。

次号の「リレー放談」は、もう一つの夜の東進会活動「謳粋会」に積極的に参加して下さるマドンナ、平成9年卒の藤井麻美子さんにお願いします。